

## 市外—追想記 丹賀砲台の爆発

### 追想記

#### 丹賀砲台の爆発

——秘められた惨事の記録——

会員 相良 主 殿

〔当時の丹賀国民学校長  
現住所—佐伯市西中区二二九三〕

今から二十九年前、私は鶴見半島の先にある丹賀国民学校に校長として赴任しました。その年、太平洋戦争が始まり、学校でも、すべてが戦時教育一色になって来ました。

昭和十七年一月十日、軍服姿の将校八名が学校に来ました。

「今度大砲試射の為に要塞に来ましたので、よろしく。聞くところによると、無医村だそうです。軍医も来たので、生徒に病人でもでたら、遠慮なく申し出てくださいます。治療してあげますから。」

と言いました。その親切な言葉に私は、これから医者が身近にいて、安心できると思ひ、厚くお礼を申しました。

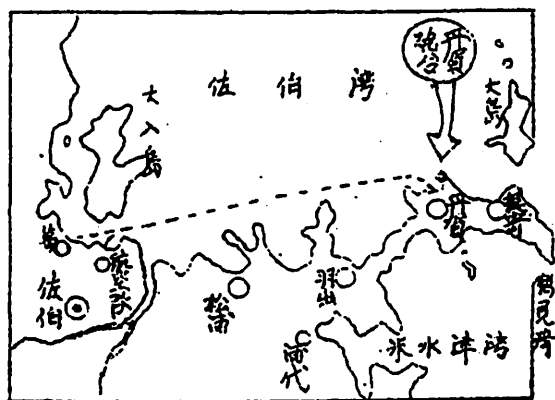
翌朝、要塞から使いが来て、

「今日、試射するから、生徒を山の上にあげて見学するように。またガラス戸などは、全部はずして整理し、爆風で破損せぬように注意して下さい。」

と言うので、急いでガラス戸をはずして廊下に重ね、職員と一しよに生徒をつれて山に上りました。

まもなく、轟燃一発、岬の一角が真赤に光りました。続いて、一発、二発と砲声が轟きました。四国の方角を見ると、遙か遠い海の上は、まるで、日本海海戦の絵で見るように水柱が立ち上り、壮烈な光景でした。

やがて、試射も終わった模様なので学校に帰り、私の席に着いたとたん、物凄い音がしました。窓から顔を出して見ると、要塞の上は、真黒でした。学校の近くにも、畳一枚程の鉄板が飛んで来ました。



それから何分たったでしょうか、駐在巡査が走つて来ました。

「学校の救急用品を全部持つて、すぐ私と要塞に来て下さい。」

というので、早速、必要な品を取まどめ、二人で出かけました。海岸には、着剣した兵隊が並び、一般村民は家から出ないように指図していました。私たちは、急いで行くように指示され、現場にかけつけました。

それは思わず息がとまる情景でした。地面に藁を敷き、爆死した何人もの将校や兵隊が横になって並んでいました。頭の形がこわれている人もいたし、腕や脚のない人もいました。大部分の人は出血がひどく、既に殆ど死んでいました。

そこへ巡視船隼丸の人が走つて来ました。

「校長先生、早く船の方に来て下さい。」

と言うので、船着場に駆けつけて見ると、五十人あまりの兵隊が、苦しみもがきながらうめき声を立てていました。見るとその中に、昨日学校に挨拶に来た軍医もいました。頭が半分に分かれていました。急いで包帯をし、脈を見ると糸のようにかすかに感じられました。カンフル注射を打とうとすると、

「自分はよいから、兵隊を頼む。」

と手をふります。私は無理に一本打ち、次々と兵隊に打ち続けました。二ダースで私の手持ちは品切れになりました。

「兵舎にまだないか。」

と私が叫びました。兵隊が、赤十字のマーク入りのトランクを持つて来ましたので、中からカンフルを取り出し、また次々に注射しました。何分にもこちらは一人、相手は五十人あまりですから、大変でした。一人の兵隊がアルコールで消毒し、巡査がアンプルの口を切り、私が注射を続けました。一通りの手当も終わったので、船は出航することになりました。佐伯の海軍航空隊で治療を受けるためです。

その日は海が荒れて波が高く、瀕死の負傷者を乗せて航空隊まで行くのは大変でした。どうか全員が無事に息のあるうちに航空隊に着いて、治療が受けられるようにと、祈る心で一杯でした。

負傷兵を隊に引渡し、帰ろうとしますと、一人の将校が、

「校長先生、今日は是非隊に泊って行って下さい。」

と言いましたが、私も学校が気になるので帰りたいと申しますと、そんなら海軍の船で送りましょうということになり、帰りは航空隊の舟艇に乗りました。

その頃から海は一層荒れはじめ、大じけとなりました。丹

賀湾の入口に来ると、日はとつぷり暮れて、航行がむずかしくなりました。

「校長先生、舟のへさきで、進路を教えてください。」と頼まりました。

「面舵、取舵の使い方も知らない。」

と言つて断ると、

「右、左と言つてくれれば、こちらで何とかする。」

このことで、私の側には将校が一名、立っていました。私は真の闇の中を、空を見たり、山の形をすかして見たりして方角を定め、やつこのことで丹賀湾に入りました。要塞の前に着いた時は、生きかえった思いがしました。

それから爆死者の遺体を海岸に収容し、木炭を下に、薪を上にして、石油をかけて火葬にしました。

一夜明け、砲台に行つて見ると、主砲は半分位から折れ、中のゼンマイのような物が、附近に一ぱい散つて、寄り付かれない有様でした。火薬の力のすさまじさをまざまざと見せつけられた思いがしました。

二か月位たつて、西部軍より、司令官と参謀肩章をつけた将校など、十名余りが学校に来ました。

「先日は、大変御苦労でした。」

と礼を述べ、感謝状をくれました。そして私が応急処置をした兵隊が、全員無事だったと知り、大変嬉しく思いました。

(附記)

1. 負傷者を佐伯海軍航空隊に運んだのは水上警察船軍丸で、当時乗船して居て血まみれの負傷兵を助けて船に乗せるのに加勢して下さった人は、今大分市南太平寺に住んでいられる姫野宗人と言う方です。
2. 丹賀砲台はこわれたまま今も残っており、鉄筋コンクリートの頑丈な要塞は、生々しい爆発の跡をそのまま残して、その入口近くには立派な慰霊碑が建っています。
3. しかし内藤中佐以下の爆死者は、戦死と認められなからか、靖国神社にまつられて居らず、遺族の人達に対し、国は殆ど何の手当もしてなく、気の毒なことです。このままでよいのでしょうか。
4. 遺族の内藤中佐夫人や、其の方々よりも来信が次々とありました。
5. 県下に在住の遺族の方が、参拝方々私を来訪されますので、委しく書きたいが何分にも老年で病床にあ

るため意にまかせず、以上で失礼します。

〈編集者そえ書き〉

丹賀砲台の爆発事故は、ほんのまだ三十年も経っていないのに、歴史的なその事実は何ら書かれたものもなく、忘れ去られようとしている。このままでよいものであるうか。

たまたま相良氏から私は三通の封書を見せていただいた。それはこの爆発事故の裏付けともなるものであるので、相良氏の諒解を求めた上で差出の三氏に乞うて、差し支えない部分を本誌に掲載させて頂くこととした。併せてお読み頂き、事故の真相とその問題点をつかむ資料としてほしいのである。(いずれも相良氏に宛てたもの)

(その一)

大分市南太平寺四組 姫野宗人氏より

相良さん、寒さが加わる折、病床にムチ打ち、戦時中の丹賀要塞の大爆発の悪夢の資料を整理している事を大分合同新聞で拝見し感銘致しています。

其の後病状はいかがですか。頑張つて完了して、後世に立派に残されんことをお願いします。

全然知らない私は、当時大分県巡査にて佐賀関警察署勤

務水上派出所に居て、時折密漁舟取締りの為、大分県巡視船隼丸(はやぶさまる)が佐賀関港に常駐し、密漁取締りを豊後水道一円についてしていたが、日支事変がはげしくなり、戦局も拡大された為か、軍の要請で軍隊の荷物及人を運ぶ仕事をして行く様になって、たまたま丹賀要塞爆発を目の当りに見たものです。もう二十五年前のこと故あまりよく記憶していませんが、思い出したまま書いて見ました。

思い出せば昭和十七年一月の真冬だったと思う。当時戦時体制は一段とはげしく強化されつつあり、足摺岬の沖、沖ノ島に豊予要塞司令部よりの命により、野砲一〇糧大砲二門等、木造船に乗せて其れを隼丸で引いて行ったことがある。たぶんこれも要塞にするためだったらしい。兵隊もかなり居たと思う。又佐田岬にも大砲や兵隊が居て陣地を構築していて、時々司令部の要請により司令部の将校及憲兵食糧等と一緒に巡視に行っていたが、当日急に司令部より丹賀要塞に行ってくれと言われ、常に乗る高野巡査部長が行ってくれないかと言われて、自分が行くことになった。何か荷物と兵隊(憲兵だったと思う)一人を乗せて司令部の棧橋を八時過ぎ出発し、一路南下、晝少し過ぎたころ

丹賀要塞の岸壁に船を着け、ちょっとしたところ、突然大爆発音と共に真黒の煙が立ち上り、同時に船のカンパン上にもカンカンと音を立てて何か落下して来た。よく見ると鉄の固まり、大きいものは拳大のものもある。これは大変だと直感し、積んでいた荷物を大急ぎに卸してしまう。

すると何人かの兵隊が顔は真黒く焼け、着ている服はボロ／＼、みんな血まみれになり息もたえだえの人が次から次と要塞の中から運び出されて来る。これは大変だ、このままではいかんと思っていたら、元氣のある兵隊らしい人がとんで来て、早く船に乗せてくれ、そうして一分でも早く佐伯航空隊の病院に送ってくれと言われたので、船員と一緒に負傷兵を船のカンパン上に引き込んだ。みんな苦痛に顔をゆがめうなっていた。まるで生地獄だった。

船上は負傷兵の血で一杯である。自分たちも服も手も血だらけになった。十五、六名を乗せたところ出発してくれと言われ、一直線佐伯航空隊岸壁に向って、全速力で海上を走った。そうして岸壁に着き、負傷兵を海軍航空隊の人に一人一人渡したが、自分達は岸壁より隊内に入れてくれないので、其のまゝ夕方出発して隼丸の寄港地向こう。警察署の方もあまり遅いので心配していたらしい。

佐賀関に飯港して前記の事を報告、翌日報告書を知るだけ書いて提出したのであった。

(中略)

終りに、この時隼丸の乗組員も全力を挙げて協力いた事を申しそえておく。

(その二)

竹田市城原 古庄シケ氏より

突然お手紙を差上げまして失礼をいたします。実は十五日付大分合同新聞の記事(編者註)を読ませていただきまして、取敢えずペンをとりました。

御病床の御様子でございますが、その後御病氣の方は如何でございますか。御案じ申し上げます。

(註) 昭和四十五年十月十五日朝刊の記事(大分合同)

私は昭和十七年一月十一日、丹賀要塞で戦死した一人、中尉横山一郎の妹でございます。

昭和二十年三月まで元県立佐伯高等女学校に主人が勤めていましたので(註古庄肇先生夫人)、一度(戦時中)島に参りましたが、今も忘れる事は出来ません。

大きい声で話せず、あの方向だと指さしも出来ない時代

で、ただお話しをソーツとお聞きして、舟で母と三人でふり返りく帰りました。

その後行けない事と思い、とうく最近はあきらめて、只一月十一日の命日をお墓参りですませています。

私共女の姉妹三人が残っていますので、出来るだけ早く現地に行つて、お参りをしたいと考えています。

女学校勤務時代の校長先生の奥様（宮前 区 真井貞子様）とはお便りをして、三年前もお宅にお伺い致しましたのでございます。私共は十八年九月二十日の水書や、十九年の航空隊の空襲も西中の元中学校の道場裏の家で過ごしました。

（中略）

これより又だんくお寒くなつて参ります。十二分御養生なさいませ様に、そして今お書きの記録を出来るだけくわしくお書き出来る様にとお祈りいたします。（下略）

（その三）

横浜市 内藤静子氏より

突然御手紙さし上げ御無礼何卒く御赦し下さいませ。

私事

中浦要塞爆発にて殉死いたしました故内藤大佐（当時中佐）の案内でございます。此の段当時の様子を新聞で発表して下されし由、主人の同期の方の息子さんと九州石油におつとめの方よりわざく新聞を送つて下さいました。

兼て秘密々々ではうむられ、私共には委しい事は知らされず、何か割り切れぬ思いで過しておりました。三十年になんなんとする今日、あなた様の思召しで真実を知る事が出来、有難く厚く御礼を申し上げます。

現地に慰霊碑の建つてゐることも初めて知りました。戦時中の事ゆえ、当時靖国に合祀されると思つて居りましたが、未だその通知もなく、遺族の方々へ申訳なう存じて居りました。慰霊碑が建てられていた事は、私として遺族の方々に對し、幾分でも心軽くなつた思いで御さいます。すぐにも御一共して下されし皆様の御霊を御慰めにとお思います。遠く離れ年と共に目も足も弱くなり、お恥ずかしながらその日一ぱいの生活の上、今は一人暮らしの身の上

如何ともなしがたく、大分の方向へお詫びと御冥福をお祈りする毎日で御座います。

あなた様には御病の御体をもかえりみられず、埋もれていた事実を世の中に出して頂き、ただく感謝の外は御座いません。有り難う御座いました。聞けばあなた様には、当時一方ならぬ御助力下さいました由、亡き主人も草葉の陰でどんなにか感謝申し上げていることと存じます。亡き皆様に代り厚く厚く御礼申し上げます。

(中略)

昨日の返事の中に、当時の事故で生き残られし方が碑を御守りして居られたが、近頃御病氣勝ちのよし、委しくは分かりませんが、その方々に若し何かの御連絡でも御ざいましたら、よろしくおつたえ下さいませ。

ただ感無量で御座います。(以上)

〈編集者添え書〉

丹賀砲台の事故は、そしてその遺跡はみんなから忘れ去られようとしている。この歴史的な事実を文字にしろして後世に残さねばならない。幸いコンクリートで堅固に構築されている砲台の跡は、大部分はそのままの形をとどめ、物凄い惨

事の跡をとどめている。

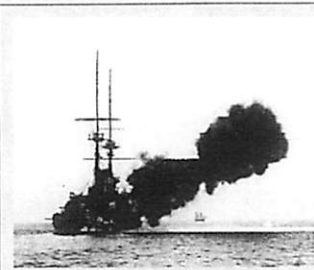
そして慰霊碑も建っている。然し私は地元丹賀の方々、どなたかが更にくわしく当時の記録を残して下さることを望んで、この紙面提供を考えている。(羽)

(『佐伯史談』第七三号 昭和四六年二月発行より)

## 鶴御崎丹賀砲台爆発事故

大太平洋戦争勃発直後の昭和16年12月下旬、豊予要塞指令部、要塞重砲兵連隊などに戦時編成が令達された。これに基づき要塞重砲兵連隊は、1か月後の17年1月11日に鶴御崎丹賀砲台で30センチカノン砲の実射訓練を実施した。

しかし、この実射訓練の終りに発射した弾丸が陸発し、砲台は一瞬の内に破壊され、多くの死傷者を出す事態が発生した。



巡洋艦「伊吹」

明治40年(1907年)に呉海軍工廠で進水、第一次世界大戦では、インド洋に展開し、後には英国艦隊と協力してオーストラリア軍の輸送護衛にあたった戦艦であった。

(観光パンフレットより)